

マニラ瑞穂記

2014.4

History of Mizuho in Manila

小劇場

●前売開始：2014年2月15日(土)

作： 秋元松代

演出：栗山民也

出演：千葉哲也 山西 惇 稲川実代子

古河耕史 高島レイ 前田一世 宇井晴雄 西原康彰 藤井咲有里

今井 聡 斉藤まりえ 仙崎貴子 日沼さくら 梶原 航 ほか

企画意図

新国立劇場では、新国立劇場研修所修了生に多くの機会を与える公演として2013年3月に福田善之作『長い墓標の列』を企画しました。引き続き第二弾として、秋元松代の名作『マニラ瑞穂記』を上演いたします。明治半ば、理想の世界を求めてアジアへと向かった多くの人たちを中心に、時代に翻弄される日本と日本人の歴史を鋭く突いたこの作品の中で描かれる世界は、現代の日本を生きる我々にとっても決して過去の出来事ではありません。

主人公の秋岡伝次郎は、明治から昭和にかけてアジアで活躍した村岡伊平治をモデルとしています。今村昌平監督・緒形拳主演の映画『女衞』はこの村岡をイメージして描かれていますが、秋元松代自身も『マニラ瑞穂記』と別に『村岡伊平治伝』という作品も執筆しており、いかにこの村岡という人物が創作意欲を掻き立てるかわかります。

『マニラ瑞穂記』、この重厚で大きな物語が、栗山演出により刺激的な舞台として蘇ります。

作品

1898年(明治31年)。マニラの日本領事館には、内乱と戦争暴動化した民衆から逃げて、在留邦人が避難していた。そこには、フィリピンの独立運動を支援しようと日本から渡った志士達や、からゆきさん達がさまざまな思いを抱えながら居合わせていた。そんな中、日本領事である高崎碌郎のもとに、シンガポールで別れ日本に帰ったはずの秋岡伝次郎があらわれる……。

賤しい生業をしていますが、南洋において自分が日本人であるという誇りを忘れず、天皇陛下を崇拜し、愛国精神にのっとなって行動する奇妙な男秋岡。かつてシンガポールで女衞をやっていた秋岡は、高崎によって仕事を奪われ、開拓、真珠採掘、行商とさまざまな仕事については統治者によって邪魔され、フィリピンに密入国の末、領事館までたどり着いたのだった。

フィリピン独立の為に、アメリカと共闘していると信じていた志士達だが、だんだんとアメリカのフィリピン植民地化への野望が見えてきていた。内地で働いても身を立てられなかった多くの日本人の魂の為に、マニラ瑞穂館を建てようと夢見る秋岡は、志士たちのパトロンとなる。

スペイン軍が降伏し、アメリカ軍が勝利したと連絡が入ったが、一時的に成立した共和政府はアメリカの資本に負けて半年で崩壊し、マニラ瑞穂館は崩壊する。そして、アメリカ軍が彼らにとった行動は……。

演出家からのメッセージ

栗山民也

秋元松代さんの戯曲は、学生の頃から愛読していた。だから、何度も読み返しては、いろいろな舞台空間を空想し、勝手に組み立て、その世界のなかでその軽妙な言葉のやりとりを楽しんだ。

2年前、新国立劇場演劇研修所第4期生の試演会で上演した秋元さんの『マニラ瑞穂記』を、今回、本公演として上演することになった。試演会では、稽古場を自由に組み立てて創った簡潔な美術だったが、今回は小劇場の空間がより密に、110数年前のあの熱を帯びたマニラの風景として、生まれ変わればと思っている。

この作品は悲喜劇でありながら、実に鋭く歴史への問題意識がドラマの底に書き込まれている。複数の立場に立つ登場人物たちの執拗なまでの好奇心と絡み合いつつ、自在にドラマは動く。鮮やかに現代へと繋がれた主題は、登場人物それぞれの夢として響き合い、健在である。

研修所修了生を中心とした若いメンバーの成長も、観てほしい。

マニラ瑞穂記

秋元松代

Akimoto Matsuyo

1911年生まれ。戦後、三好十郎に師事してラジオドラマなどを執筆。47年に初の戯曲『軽塵』を発表、49年の『礼服』が劇団俳優座によって上演され、注目を集める。その後60年『村岡伊平次伝』、64年『常陸坊海尊』（田村敏子賞・芸術祭賞受賞）、69年『かさぶた式部考』（毎日芸術賞受賞）、75年『七人みさき』（読売文学賞受賞）などを執筆、日本各地の説話・伝記などに材を採った重厚な作風で高い評価を得た。79年には紫綬褒章を受章。さらに、79年初演の蜷川幸雄演出の『近松心中物語』は、キャストを変えて通算上演回数1000回を超える人気の舞台となった。ほかに蜷川幸雄演出で80年『元禄港歌』、82年『南北恋物語』がある。2001年逝去。その年に創設された朝日舞台芸術賞に「秋元松代賞」が設けられていた。



栗山民也

Kuriyama Tamiya



早稲田大学文学部演劇科卒業。主な演出作品に『GHETTO／ゲッター』『太鼓たたいて笛ふいて』『マリー・アントワネット』『ロマンス』『炎の人』『組曲虐殺』『日本人のへそ』などがある。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞千田是也賞、朝日舞台芸術賞などを受賞。新国立劇場では『今宵かぎりには…』『ブッダ』『キーン』『夜への長い旅路』『欲望という名の電車』『ピカドン・キジムナー』『夢の裂け目』『ワーニャおじさん』『櫻の園』『浮標』『夢の泪』『涙の谷、銀河の丘』『世阿彌』『胎内』『喪服の似合うエレクトラ』『箱根強羅ホテル』『母・肝っ玉とその子供たち』『夢の痂』『CLEANSKINS／きれいな肌』『氷屋来たる』『まほろば』『雨』、オペラ『夕鶴』『蝶々夫人』を演出。著書に『演出家の仕事』。新国立劇場演劇芸術監督を7シーズン務め、現在、新国立劇場演劇研修所所長。